

2015年2つの選挙に見るスペイン政治とカタルーニャ政治の連関形態の変容

加藤 伸吾

(慶應義塾大学経済学部専任講師)

昨年末、スペインでは総選挙が行われた。またその前の昨年9月には、独立機運の高まるカタルーニャ自治州で、州議会選挙が行われた。日本の報道機関でもそれなりに取り上げられたようである。

●2015年スペイン2つの選挙

まず、それぞれ結果を確認しておきたい。総選挙では、前与党国民党(PP)が第1党の座を再び確保したが、2011年総選挙の時のように、上院に対する優越が規定されている下院での絶対過半数には遠く及ばず。社会労働党(PSOE)も同様だが、これは、日本でも報じられているように、左右双方に新党が出現したことによる。右の市民党と左のポデモスである。州議会選挙では、独立派連合ジュンツ・パル・シー(JxSi)が、辛くも州議会で過半数に届かずであった。まずは、下の表2つをご覧ください。

表1 2015年スペイン総選挙結果

(下院:定数350、議席順に配列。出典:内務省ウェブページ)

国民党(PP)	123(前回議席数186)
社会労働党(PSOE)	90(110)
ポデモス(ポデモス系諸派が統一会派)	69(-)
市民党	40
カタルーニャ共和左翼(ERC (*注1))	9(3)
民主主義と自由(LD (*注2))	8(16)
バスク民族主義党(PNV)	6(5)
人民統一(UP (*注3))	2(11)
祖国バスク・ビルドゥ(EH-Bildu (*注4))	2(7)
カナリアス連合(CC)	1(2)

(*注1:カタルーニャ議会ではJxSi)

(*注2:旧カタルーニャ集中連合(CiU)、カタルーニャ議会ではJxSi)

(*注3:旧統一左翼(IU)。共産党含む政党連合)

(*注4:前回党名は「アマイウール」。バスク民族主義強硬派政党)

表2 2015年カタルーニャ州議会選挙結果
(定数135。出典:カタルーニャ州選挙管理委員会ウェブページ)

<独立派>	
独立派連合ジュンツ・パル・シー (JxSi)	62(71 (*注1))
人民統一候補 (CUP)	10(3)
<非独立派>	
市民党	25(9)
カタルーニャ社会党 (PSC (*注2))	16(20)
カタルーニャ・シー・ク・アス・ポット (CSQP)	11(-)
国民党 (PP)	11(19)

(*注1: 前回は会派が存在せず、CiU+ERCの合計議席数)

(*注2: PSOEの連合政党)

●スペイン政治とカタルーニャ政治の連関

まず、従前のスペイン政治のパターンを確認しておきたい。一言で言えば、国会下院の二大政党のうち与党が下院絶対過半数を持たない際、同じく下院にも議席を持つ、カタルーニャやバスクなど地域ナショナリスト政党、及び全国政党ながら議席数の少ない統一左翼(現在はUP)らの協力を得て政権運営を行っていた。

国民党と社会労働党の二大政党は、ゴンサレス PSOE 政権(1982~96)、アスナール PP 政権(1996~2004)、サパテロ PSOE 政権(2004~2011)と、与党が下院過半数を上回る176議席を持っていない時には、少数政党と法案など案件ごとに協力するのが常態であった。

その協力相手としてよく選ばれていたのが、カタルーニャ州議会で長年与党だっただけでなく、下院にも隠然たる勢力としてあり続けた、カタルーニャ集中連合(CiU)である。以前はジョルディ・プジョルがカタルーニャ州政府で20年間ほどの長期政権を維持していたが、このプジョルは、現行1978年憲法の制定及びその後の17自治州による自治州国家体制が成立する際、妥協の結果当初想定していた大きな自治権が得られなかったため、下院での与党協力と引き換えに自治権拡大をスペイン中央政府から引き出す戦略を採っていた。

2015年の2つの選挙後、このパターンはどうなるのか。

●2つの新党と政党システムの変化

まず総選挙結果を見れば、従前のPP+PSOE+少数政党という構図からは一変している。右派勢力として食い込んだ市民党、左派にはポデモスが一大勢力を獲得している。市民党ポデモス双方とも、市民運動に出自を持つと称しており、PPとPSOEで相次ぐ政治腐敗事件を糾弾して、古い政治階層をまとめて批判することで清新さを選挙民に訴え、成果を得た。

これで、スペイン国会は四大政党+少数政党となった、とひとまず言える。

しかし実は、PPとその批判票を得た市民党の右派系、PSOEとその批判票を得たポデモスの左派系を、それぞれ右派と左派のブロックと見れば、右派ブロック+左派ブロック+地域ナショナリストなど少数政党という構図は、変わってはいない。

変わった点は、それぞれブロック内で交渉する必要があることはあること、及び、ブロックを超えた政権協力の可能性が、それぞれ政党指導者の口から言及されていることである。

●カタルーニャの変化

また、政権与党の協力相手として、CiUあるいはその後継の下院会派であるLDはもはや期待できない。なぜなら、LDの母体はCiU、その党首はアルトゥール・マスで、カタルーニャ独立機運が起きたここ数年のカタルーニャ州首相であり、独立派連合JxSiの一員だからである。下院少数与党の足元を見て自治権拡大という従来の方針どころではなく、独立にまで大きく踏み込んでいる。

なお、マスはもう既に州首相の座を追われ、同じJxSiでジローナ市長を務めていた独立強硬派カルラス・プッジダモンが後継州首相として就任したのは、日本でも一部報道機関既報の通りだが、これには以下のような事情があった。

つまり、JxSiではないもう一つのカタルーニャ独立主義勢力で、反資本主義を掲げるCUPが、先のジョルディ・プジョルにここ数年浮上している汚職と不正蓄財に、プジョルの指名を受けて後を継いだマスが繋がっていると見て、「資本主義の汚染の象徴」としてマスが州首相になるのを強硬に嫌ったのである。CUPは、同じ独立派のJxSiが州議会で絶対過半数を持っていないことを見越しており、JxSiはCUPの動向を無視できなかった。CUPは、次期州首相候補に関するJxSiとの交渉に際して、党内民主主義を徹底させた結果、党内の反マス勢力が辛勝することで「マス下ろし」が完成した。しかしその代償として、CUP党内は反マス・反資本主義を優先させるグループと、マスを支持してカタルーニャ独立を優先させるグループに真っ二つに分断され、かつ、CUPでマス州首相就任に反対していた州議会議員が辞職、賛成の議員はJxSiに吸収され、党存続の危機に立たされている。

●政権交渉と各党のカタルーニャに対する態度

本稿執筆時点で、下院における首相指名のめどは立っておらず、ラホイ暫定政権が続いているが、PP、PSOE、市民党、ポデモス、加えて、UPやバスク民族主義党の間の交渉では、カタルーニャにどのような態度をとるかが、最重要焦点の一つとなっている。

スペインでは、総選挙後下院が会派を立ち上げ、その後国王が各会派代表と会談の上、国王の名前で1名に対し組閣要請が行われる。その後下院での施政方針演説と信任投票に入る。

今回は、少数とはいえ第1党のPPラホイが国王フェリペ6世の指名を受けたが、ラホイは「十分な支持が得られない」として組閣要請を断った。政権協力に関し意見が割れているPSOEのサンチェス書記長にボールを投げ返し、サンチェスの自滅を待つ戦略である。

フェリペ6世は、2度目の会派代表会談を終了、その後サンチェスに組閣要請を行い、現在サンチェスとPSOE内特命チームによる他会派代表との交渉が続いている。サンチェスは、2016年2月10日の時点で、ラホイとの政権協力、あるいは以前に自ら一度否定した大連立も含めて、可能性を探っている。

実は、そのPSOE党内不統一も、カタルーニャをめぐる対立が重要な原因の一つである。例えば、アンダルシーア州首相ディアスなど各自治州の重鎮の多くは、憲法にも規定のある「スペインの揺るぎない統一」を重視し、カタルーニャへの譲歩を嫌っている。他方サンチェスは、一昨年書記長就任の際にディアスを下す形で書記

長レースを制しており、カタルーニャ問題に関しては、サンチェス及びその周辺が、改憲を伴う連邦制導入による権限の強化、及び憲法でカタルーニャを現行の「民族体 *nacionalidad*」という曖昧な言葉ではなく、「*nación* 民族」として認めることまで暗に示唆している。また、カタルーニャ社会党 (PSC) は PSOE 内の重要な連合政党であり続けている。

つまり、スペイン全国政党の党内対立にまで、カタルーニャ独立問題は影響しているのである。

他方、ラホイ PP は、この総選挙前一貫して、カタルーニャ独立派を敵視する言説戦略をとり、カタルーニャで独立機運を焚きつけてカタルーニャにおける PP 支持を犠牲にする一方で、カタルーニャ以外のスペインにおける反カタルーニャ、スペイン・ナショナリスト感情を利用して支持を伸ばすという選挙戦略を採り続けていた。

市民党は、PSOE のディアスと同様「スペインの統一」を政権協力交渉の譲れない一線として掲げている。市民党はカタルーニャに出自を持つ政党だが、カタルーニャにもいる反独立派を代表する政党である。

ポデモスは、先のサンチェスに見られた主張に同調しているのに加え、カタルーニャで違憲判決を受けそれでも強行された、独立の是非を問う住民投票の実施を主張しており、サンチェスとの政権協力交渉ではそれを改めて実施することを要求している。

サンチェス PSOE が結果的にどの党と組んで、どのような政権ができるかは、現時点では全く判然としない。一時期、PSOE+PP の大連立やそれに市民党を加えたもの、あるいは PSOE+ポデモス+UP の左派連合政権などが取りざたされていた。

サンチェスは「変革のための政権をつくる」と曖昧な表現にとどめ、つまり全方位的に交渉する姿勢を崩していない。総選挙結果でポデモスに大きく議席を奪われている以上、ディアスら党内の重鎮の意見を無下にすることもできない。

なお、今の交渉が不調の場合、出直し総選挙が視野に入ってくる。現時点での現地報道によれば、やり直しの日程は、3月国会解散、5月総選挙の公算が最も高い。

●結論:スペイン政治の変容と今後

このように、下院の二大政党が四大政党になること、及びカタルーニャの独立問題が進行することによって、従前の「スペイン下院二大政党の少数与党と、自治権拡大交渉を有利に進めるためにカタルーニャの地域ナショナリスト政党が協力する」という形態は、もう見られなくなった。しかし、PSOE の党内闘争、あるいはスペイン中央政府での政権交渉に際してカタルーニャ問題が一大争点化する形で、スペイン政治とカタルーニャ政治の連関はまだ続いている。

サンチェスの政権交渉がうまくいけば、その政権の形によってその後の連関形態が見えてくることだろう。

政権に、反カタルーニャ独立派である PP との大連立、あるいは、同様の市民党が、PP 込みか抜きかにかかわらず、なんらかの形で参画するなら、その後はカタルーニャ政治との連関は一度断絶することも考えられる。その場合、カタルーニャは現在進めている「独立プロセス」をそのまま進め、スペイン中央とカタルーニャ州政府の対立は激化が予想される。

他方、左派連合政権が成立すれば、PSOE の主張する連邦制導入も見えてくる。その場合、連邦内の各州にどれほどの権限が与えられるかにもよるが、もし現在の自治州体制と大差なければ、カタルーニャの独立問題は再びいつでも前景化し、スペイン政治に影響を及ぼし続けるだろう。

どう転ぶにせよ、スペインはカタルーニャを無視することはできない。

追記:

カタルーニャの独立可否に関しては、現行法制を前提とする場合、法的には不可能である。端的に言えば、現行法制が自治州の独立を想定しておらず、前述のように現行憲法に「スペインの揺るぎない統一」が明記されており、どうしても違憲判決が出るようになっているからである。

対外的に見ると、EUでは、ジャン＝クロード・ユンケル欧州委員会委員長が、「EU加盟国内の地域の独立は、当該国の憲法に委ねられる」と、欧州国民党からの質問状に対し文章で回答し、従来の立場を維持している¹。バン・キムン国連事務総長は、カタルーニャの独立に関して「自治政府を持たないと国連が認める17の地域のリストの中に、カタルーニャは入っていない」とこちらも否定的な態度である²。

となれば、まずは国内での政治的決着を図るしかない。

筆者は、カタルーニャ問題に起因する「OECD加盟国初の大規模内戦」勃発への懸念をスペイン語のインターネットなどで目にしたことがあるが、かなり懐疑的と言わざるを得ない。たった数十年前に悲惨な内戦とその後10年以上の国際的孤立、及びそれに由来する極端な貧困を経験し、現在も国内の歴史認識問題を抱えるスペインでもある。また、国内に米国の基地もあり、NATOにも加盟していることから、その可能性は限りなくゼロに近い。

¹ 英紙ガーディアンのウェブページに、ユンケルの文書が英西2バージョンとも掲載されている(最終閲覧日:2016年2月10日)。
<http://www.theguardian.com/world/2015/sep/25/jean-claude-juncker-response-on-catalonian-independence-grows-in-translation>

² 2015年10月30日付AFP報道(最終閲覧日:2016年2月10日)。
<http://news.yahoo.com/catalonia-cannot-claim-self-determination-un-chief-000527970.html>